
殺人鬼の日常。

小石 汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼の日常。

【Nコード】

N29450

【作者名】

小石 汐

【あらすじ】

殺人鬼と呼ばれた男、南雲 冬夜は銃で撃たれ、一度は死んだ——はずだった。致命傷だったはずだ、と冬夜は考え、走馬灯の中にいるのだ、と結論を出すも、違和感が拭えなかった。そして違和感は、やがて現実となり、歴史は大きく変わってゆく。

そこで冬夜はようやく理解する——この世界も本物だ、と。

*2011/12/2

ひょうりばーす↓代理者の慟哭、と来て、二回目の改稿中です。

真に勝手に申し訳ございませんが、引き続きお付き合いいただければ幸いです。

殺人鬼の最後

立ち並ぶビルの合間、細い路地を照らすのは、大通りから差し込む僅かな光だけだった。そのせいか、奥に進めば進むほど、薄暗くなつてゆく。少し先を見通せないほどではないが、路地の奥へと続く闇は恐れを抱くには充分なほどに濃かった。またカビ臭さと、何かの腐ったような臭いが混ざり、鼻をついた。よく見ると、路地には破けたビニール袋が散乱していた。これが臭いの原因だろう。

恐らく、誰もが踏み込むことを躊躇するだろう。しかし、そんな所に一人の男が現れた。動きは鈍く、ビルの壁に手をつきながらも男は進む。時折、水が滴るような音が細い路地に響くも、大通りから流れ込む喧騒に吞まれていった。

男の名は南雲なぐも 冬夜ふゆやと言い、全国指名手配犯の中でも、ダントツの知名度を誇る。無差別に殺してきた人の数は一体どれほどになったのか——もはや本人ですら把握できていない。血の臭いが全身に染み付くほど、屍の山を築いてきた。そのためか、路地に入った当初、充満する悪臭に顔をしかめた。自分の臭いと違うため、余計に鼻についたのだ。しかし、それにもすぐ慣れる。どちらにせよ、後戻りはできない。今、大通りに出たら、どうなるかは簡単に想像がつく。

捕まって、退屈な時を過ごして、最終的に死刑にされるぐらいなら、自らで命を絶ったほうがマシだろうか——冬夜は苦い笑みを漏らしながら、腰に差しているナイフに思いを馳せた。日本の裁判制度は長すぎる。もっとスケジュールを詰めて、さっと執行してほしいものだ、と誰もいない路地に呟いた。

冬夜は一度、後ろを振り返る。幾度か角を曲がったので、大通りからの光も届かない。そんな中、目を凝らす。闇に慣れつつあった目に人影は映らなかった。とりあえず、追っ手はいないようだ。しかし、どこからともなく聞こえてくる怒声に、身を強張らせた。ま

だ近い、と冬夜は更に奥へと足を進める。しかし、そこで気づく。自らの足元に滴る確かな痕跡に。

見つかるのも時間の問題だろう。冬夜は半分諦めながら、壁にもたれかかった。しかし、膝に力が入らず、ずるずると壁に背を擦りながら崩れ落ちる。そして残してきた痕跡に目をやった。自分の腹部から流れ落ちた血液を指でなぞり、苦笑を漏らした。

腹部には二つの穴があった。銃で撃たれたのだ。当初は焼けるような痛みが続いていたが、それも鈍くなり、痛む範囲が広くなったように感じる。止血しようと手で押さえて来たものの、一向に止まる気配は無い。冬夜は諦めて、傷口から手を離した。

刹那、薄暗い路地に小さな光が躍る。来たか、と冬夜は身構えるも、もはや身体が言うことを聞かなかった。血を失いすぎたのだ。恐らく追っ手が持つ懐中電灯か何かの光だろう。でなければ何度も角を曲がっているのに、こんなところまで光が届くはずが無いのだ。詰みか、と小さく零して、冬夜は壁に身を預け、目を瞑った。

そのまま眠りにつけそうな心地に陥る。もう、そのまま目が覚めなければいいのに、と冬夜は思った。むしろ、こんなことになるなら、最初から無駄な抵抗などしなければ良かった。腹部に二発、銃弾を受けてしまった時点で諦めれば良かった。無駄な努力だった、と冬夜は締めくくる。

いつしか臭いや音が消えていた。元々、薄暗い路地であつたが、更に暗くなつてゆく。そして意識がまどろんでいった。こんな心地で死ねるだけマシなのかもしれない、と冬夜は僅かに安堵の息を漏らした。

ふと目が痛んだ。暗くなりつつあつた視界に、光が戻る。しかし、輪郭ははっきりとしない。冬夜の目を刺激するただけに、鋭い光が向けられたかのようにあつた。その刺激に応じるかのように、聴覚も少しだけ戻る。面倒くさいと思いつつも、血に濡れた手をかざし、光を遮る。何かが聞こえた。ただ反応を示す余裕など無かつた。かざした手すら、再び真っ赤な海に落ちて、血が跳ねた。

刹那、腹部に衝撃が走る。息が詰まり、冬夜は必死に酸素を求めた。これから死ぬと言うのに、酸素を求めるといふ行為が何とも矛盾しているように感じた。しかし、苦しみたくはない、と自身を納得させた。

「おい、生きてるか」

今度は声を聞き取れた。透き通るような声をはつきりと。その声の方に目をやると、紺の制服に身を包んだ女性が立っていた。見下すような冷たい眼差しが冬夜に注がれる。まあそれぐらいのことをやってきたしな、と冬夜は苦笑を漏らした。

「笑うな、ゲス」

女はコンパクトなモーションで再び蹴りを放つ。防ぐ間も無かった。固い爪先が冬夜のみぞおちを的確に捉え、再び息が詰まり、吐き氣と息苦しさに苛まれる。

それにしても撃つたところを蹴るか、と冬夜は苦い笑みを漏らした。それも仕方が無いことだ、と認識した上で。あれだけ人を殺してきたのだから、殺されそうになった際に文句を漏らすつもりなど無かった。むしろ、さっさと殺せ、と冬夜は呟いた。

「そう簡単に死なせると思う？」

女の言葉に冬夜は絶望する。これから死ぬまでに、どれほど退屈な時間を過ごさなければならぬのだろうか、と考えると、ぞつとした。

「……の割には矛盾した行動だな、撃つたところをわざわざ蹴るなんて」

サデリストか、と冬夜が尋ねると、再び蹴られた。この女、容赦ない。

「お前には裁きを受けてもらっ

「法廷で？」

そうだ、と女は答えた。それに「冗談じゃない」と冬夜は返す。「もう自分でも分からないほど人を殺してきたんだ。死刑以外に無いだろう。どっちにしても死ぬんだったら、ここで死んでも同じだ

る？」

むしろ、冬夜が捕まった、なんてニュースが流れたら、遺族がすぐに殺せ、と泣き叫び、怒り狂うのではないだろうか。それなら犯人死亡で、さつさと事を済ませたほうが良いような気もした。人の死は物事を沈静化させる際、絶大な効果を発揮するからだ。

そんなことを考えながら、冬夜は顔を上げた。影になって女の表情は読めなかった。ただ、僅かな光を反射する両眼に、冷たいものを感じた。

「死刑とは限らない」

「無期懲でも結果は一緒だぜ？」

暇で憤死する、と冬夜は笑いながら告げる。そして予想通り、冬夜は再び腹部を蹴られた。

「贖罪を暇と言うか」

「お前さんが言うに、俺はゲスだからな」

大体、罪って何だよ、と冬夜はむせながら呟く。

「昔のお偉い方々が作ったルールを破ってはいけません、なんて馬鹿馬鹿しいと思わないか？」

「それでも人を殺してはいけない」

当たり前で模範のような答えが返ってきた。これも冬夜の予想通りだった。分かっちゃいないな、と苦い笑みを零す。しかし、蹴りは飛んでこなかった。

「別に人を殺してはいけません、とは誰も言えないだろう。元々、生物つてのは争うもんだ。殺し合うのが当然だ。それを不自然に捻じ曲げるために、人がルールを築き上げたんだ」

土台を捻じ曲げた上にできた世界なんて壊れるべきだ、と冬夜は言う。それに対する反応は無かった。ただ女の瞳に宿る光が、どこか悲しみの色を帯びたように見えた。

「あなたの常識を疑うわ」

「知ってるか？ 常識つてのは、おおよそ成人までに身につけた独断と偏見のことを言うんだぜ」

どこかの天才が言っていた、と告げることはなかった。まるで自分が生み出した言葉のように堂々と言った。実際、常識とはそんなものだ。育った環境に大きく左右される。そして育つ環境は、人の数だけある。同じ家庭に生まれた兄弟でも、そこには兄と弟、そして生まれた時代背景が絡んでくるため、完全に同じ常識になるとは限らない。それは成長するに従って、より大きく変わっていく。結果、生まれる常識は、その人にとっての物でしかないのだ。本当に全世界共通の――それこそ、どこでも常に通る知識なんてあるかどうか怪しいものだ、と冬夜は推測している。

「それでも人を殺してはいけない」

女は模範解答を再び告げた。もはや、話しても無駄であることを悟り、冬夜は大げさにため息をついてみせる。それは呆れだけではない。本当に問答が疲れてきたのもあった。

ふと視線を落とす、と血の海が冬夜の腰を中心にじんわりと広がってゆく。それを見つめていると、不意に意識が遠のいた。がくり、と頭が落ちる。その反動で何とか意識を取り戻すも、抗いがたい眠気が再び冬夜を襲う。それと同時に悪寒が背筋を抜けて、体が震えた。悪寒と眠気が競り合う。簡単に眠気が勝った。こんな状態でも眠れるんだな、と冬夜は静かになつてゆく思考の中で呟いた。

その直後、眠ると言うより、意識を失いかけているのだと冬夜はすぐに気づいた。死が近い。今、自分の後ろに死神さんがスタンバイしていると言われれば、即座に信じただろう。そして、さっさと殺せ、と死神に願っただろう。

「救急車は手配しているんだから、死んだら許さない」

身体が前後に揺れる。しかし、その感覚も遠のいていった。恐らく女が自分の体を揺らしているのだろう。それでも、この眠気には抗えない。瞼が落ち、世界が闇に包まれる。そして音も消えていった。

冬夜はしんと静まった闇の中、心地よさを覚えていた。逃亡生活中、一度でもここまで落ち着けたことがあっただろうか。無かった

とは言わない。実際、いつ死んでも仕方ないと考えていた冬夜の逃亡生活に、緊張感は無縁だった。のらりくらりと人を殺しながら、生きながらえていた。それでも、もう逃げる必要がないどころか、何もする必要もない状況は久しぶりだった。やっと休める、とほっとした。

いつしか、それらも消える。闇すらも。意識が完全に途切れたのだ。そして脈拍が止まる。こうして殺人鬼、南雲 冬夜はようやく止まることができた。

いゝこと（前書き）

先に一言。この話の序盤で殺人について、もろもろ書いていますが、私自身が殺人を肯定しているわけではありません。むしろ、自棄になったとしても、私は誰にも迷惑かけずに、ひっそりと死にたい。何もできない人は、何もせずに世界から退場すればいいのです。あ、私事ですので。

ころすということ

人を殺してはいけない——そんなルールが当然のように敷かれている世界だが、実際はそうなのだろうか。

人を殺してはいけない理由として、他人にやられて不愉快なことはしないように、と教える両親や教師がいる。ならば、殺されても構わないのなら、人を殺してもいいのだろうか、ということになる。それは自暴自棄になって、無差別に殺人を繰り返すことを認めてしまうことになる。

また別の理由として、誰かが悲しむから、と言う人もいるが、それも先ほど述べた理由と似たところがある。あなたが誰かを殺す。すると、その誰かを知っている人が悲しむ。つまり、あなたの周りの大切な人が殺された時を想像しなさい。不愉快でしょう？ と尋ねているようなものだ。ただ、この場合も不愉快じゃないし、自分の周りに失って困るような人はいません、となると相手は絶句するのだろう。

最後に法律で罰せられるから、と言う人もいる。ただ、それは人を殺してはいけない理由になっていないことを彼らは理解していない。別に人を殺してもいいですよ。ただ、殺した際はそれ相応のペナルティを負ってもらいますからね、と言うのが法律なのだ。もちろん、その刑罰を明確にすることで、抑止力に繋がる。しかし、それは人を殺してはいけない理由にはならない。法律によって守られることを望まなければ、それを守る理由など無いのだ。

守りたい者だけ、守っていればいい——冬夜はそう考えていた。だから、身勝手なのは重々承知で、人を殺し続けた。ただ、殺されてもいいと考える者が、生きるために人を殺すと言うのも、これまた矛盾しているように思えた。しかし、飢餓や寝不足で苦しむのは本望ではない、と簡単に考えて、次々と人を襲った。

そんな冬夜は止まった。ようやく止まれた、と満足感の中、死ん

でいった——はずだった。

「何だ、これは」と冬夜は思わず呟いた。仰向けになって、しかもふかふかで温かいベッドに横になっている。どうしてこんなことになっているのか、理解できなかった。

冬夜は白い天井を見つめながら、必死に記憶を辿る。逃げている最中に撃たれて、そして意識を失って……病院？ そろりと冬夜は首を横に振った。しかし、どう見ても、病室ではない。机とタンスがあるだけの簡素な部屋だった。テレビは無い。ただ、机の上に大きなパソコンが一台置いてあった。床には無造作に服が散らばっている。

どこことなく見覚えのある風景に、冬夜は眉をひそめる。掛け布団をめくり、恐る恐る身を起こす。そこで違和感に気づく。むしろ、違和感が無いことに違和感を抱いた、と言うべきだろうか。撃たれたはずの腹部に痛覚や違和感が無かったのだ。

まずは周囲を確認する。人の気配が少しだけするが、その音は遠い。更に部屋の隅まで観察してから、一息吐く。監視カメラも無い。一体何を考えているんだ、と呆れながらも、冬夜は服をまくった。撃たれたはずの腹部に傷は無かった。

そこで再び思考する。撃たれた傷が治ってしまうほど、長く眠っていたのだろうか。しかし、冬夜はそれを即座に否定する。そんな長い時間を眠って過ごしていたら、今こうして身を起こすのも大変だったに違いない。

何かが変だ、と訝りながら、ベッドを抜け出る。足元に散らばる服を踏まないように気をつけながら、部屋を出る唯一の扉へと忍び寄った。そつと扉の取っ手に手を伸ばす。何か仕掛けがあるような重みは無いし、鍵もかかっていない。冬夜はそつと扉を開け、その隙間から外の様子を伺う。先ほど聞き取れた音が僅かに大きくなったように感じた。

どこかの一軒家の廊下のようなようだった。フローリングがずっと奥に続いて、その先に階段がある。階段が螺旋状になっているのか、下

のフロアまでは見通せない。ただ、ここが二階以上であることだけは確かだった。

それと同時に僅かな隙間から流れ込んでくる香りは、どこことなく懐かしさを覚えた。しかし、それを振り払うように、冬夜は扉をそつと閉めた。人の気配がする以上、先に進むのは危険だと判断したのだ。何故こんな状態になっているのか分らないが、傷も塞がり、体調はほぼ完璧に近い状態なのだから逃げることも可能かもしれない、と冬夜は考え始めた。足音を消したまま、部屋の中央に立つ。そして二つの選択肢を見やって、冬夜は考える。

冬夜の視線の先には窓が二つあった。どちらも普通の窓のようで、薄いカーテンが陽光を程よく遮っていた。直接触れるのは気が引けたが、この部屋にある物を利用して結果は似たようなところだ。何かしら痕跡が残る、と考えた所で、冬夜はふつと息を吐いた。痕跡も何も、先ほどまで自分はあのベッドで寝ていたではないか、と苦い笑みを零し、そこから冬夜の行動は大胆になった。

机の上にあったシャープペンを手にとり、カーテンを開いた。そこには普通の窓があった。これなら、すぐに逃げ出せるかもしれない、と思えるぐらいに普通だった。しかし、冬夜は硬直する。まるで、そこに罠があるのを発見したかのような、驚愕の表情で窓を見つめていた。否、正確に言うならば、窓の外に広がる風景だろうか。しばらく、それを見つめた後、何かに気づいたように冬夜は部屋を振り返った。

まさか、と小さく呟く。ここは――。

「俺の、部屋？」

何年も昔に逃げ出した場所に、冬夜は立っていた。何の冗談だと笑い飛ばそうと思っても、頬は自然と引きつる。あの女が、ここに自分を運んだのだろうか。それこそ余計なお世話だ、と内から熱が湧き上がった。

殺してやる、と明確な殺意を持ったのは久しぶりだ。今までは成り行きで面倒くさくなり、結果的に殺すことが多かった。殺すこと

が目的なのではない。別の目的があり、それに向けて行動を起こしている内に殺すと言う結果に辿り着くケースが多かったただけなのだ。そのため、久しく湧いた感情のコントロールに手間取る。むしろ、コントロールする気も失せた。冬夜は乱雑に扉を開けて、廊下に出た。

それと、ほぼ同時に廊下にあった一つの扉が開いた。そして顔を覗かせた少女が目丸くして、冬夜を見つめる。そして冬夜も硬直した。

「ど、どうしたの、兄ちゃん」

尋ねられていることは理解している。しかし、今の冬夜に答える余裕は無かった。溢れ出しそうなほど疑問符が浮かび続け、頭の中が詰まりパンクしそうだった。情報過多だった。その一言と彼女に出会ったことで、大体のことは把握できたものの、何故そうなっているのが分からなかった。むしろ、こんな状態になるはずがないのだ。

「もしかして、気分良くなった？」

驚きの色が薄くなり、少女の瞳に期待の光が宿る。しかし、それにも答えられない。やがて、少女は失望したかのように肩を落とす。た。「もういいよ」と小さく不貞腐れたように零すと、冬夜に背を向けて階段を下りて行った。

冬夜は一人廊下で立ち尽くす。ようやく疑問符が少しずつ消えてゆき、思考の余裕が生まれた。そして結論は驚くほど、あつと言う間に導き出される。

「走馬灯、か」

後頭部を掻きながら、ため息をつく。そして冬夜は階段を下りていった。走馬灯なら遠慮なく立ち振る舞おう。もはや、足音に気を遣う必要も無い、と冬夜はリビングに向かった。懐かしいな、と冬夜は玄関などを一瞥し、思わずため息を漏らす。それが安堵と呆れが混じったような息だった。

そしてリビングへと続く扉を開く。その瞬間、時が止まったよう

に感じた。母も父も妹も、皆自分を見て、固まったのだ。テレビから流れるニュースと、フライパンに熱された何かが鳴いている。それ以外の音は無かった。

おはようと、母がぎこちなく言う。それにさらりと答えながら、冬夜は食器棚を開いた。

「朝ごはん、すぐに準備するから」

冬夜はコップを取り出して、食器棚を閉めた。

「いいよ、別に」と冬夜は断る。何か言いたそうな母の横を通り過ぎて、キッチンに入った。そして蛇口を捻って、コップに水を注ぐ。それを一気に飲み干してから、冬夜は再び口を開いた。

「朝は食べられる気がしない」

そして、もう一杯水を飲み干して、コップを置いた。

「じゃあ、お昼、お弁当は？」

弁当？ と冬夜は思わず聞き返した。その際に制服姿の妹の姿が視界に入り、納得する。まだ自分が学生だった頃の走馬灯なのか、と。それにしても今はいつなのだろうか、と冬夜は内心で首を傾げながら、とりあえず弁当の申し出を断った。「そう」と母は悲しそうに目を伏せた。何も言わなかった父と妹も、どことなく暗い表情で黙々と朝食を口に運んでいた。それにしても良い匂いだな、と母の手にあるフライパンに目をやると、ウィンナーが焼け、ぱちぱちと鳴きながら跳ねていた。

「それ、一つだけ貰っていい？」

そう言って、冬夜はフライパンに手を伸ばした。許可を得る前にフライパンに乗ったウィンナーを手にし、口に運んだ。予想以上に熱かったが、噛み潰すと肉汁が口内に広がった。それがまた熱く、苦労しながら飲み込んだ。喉元過ぎれば熱さを忘れる、ってのはウソだ。胃の中に広がる熱は気味が悪く、冬夜を苛んだ。

そして母に背を向けて、リビングを後にしようとする。さて、どうしてくれようか、この走馬灯、と考えながら、扉に手を伸ばした所で、「冬夜」と呼び止められた。低く、重圧な声だった。それに

答えることなく、冬夜は振り返った。父が渋い顔で口を開く。

「高校ぐらいは出ておけよ」

「出て、何か得するなら」

冬夜は悪気もなく、率直に返した。そして何か言いたげに口を動かす父に背を向けた。待て、と声が聞こえる。しかし、冬夜は無視した。そのまま階段を上り、自室に戻った。そしてベッドに再び横たわった。まだ肌寒く、掛け布団の中に身を滑り込ませる。

「……案外、暇だな」

白い天井を見つめたまま、冬夜は呟いた。やがて、ばたばたと廊下を走る音が僅かに聞こえてくる。そして「いつてきます」と妹の夕夏ゆうかが玄関を出ていった。

部屋を区切る扉と違い、玄関の重厚な扉を開け閉めすると、家全体に音が響く。どこに行くにも誰かに知られてしまうのを嫌い、冬夜はいつしか玄関の扉を音無く開け閉めすることが得意になってしまった。それが後々の逃亡生活でも役に立ったのだから、人生で何が役に立つかなんて分からないものだ、と今更思い耽った。

それにしても退屈だ、と冬夜は思う。あの頃の自分は一体何をしていただろうか、と思い出そうとしても、その後に刻んだ記憶が斬新すぎて、記憶が霞んでいた。とは言え、パソコンに向かっていたような気がするな、と冬夜は布団から抜け出て、パソコンを起動した。

「……遅え」

電源ボタンを押し、パスワードを打ち込む画面まで、しばらく待つ。そしてパスワードを打ち込んでから、更に待ってようやくデスクトップの画面が表示された。一体どんなオペレーションシステムを使っているんだ、と考えて思い出す。窓社の二〇〇〇だ。

ようやく起動したブラウザのお気に入りを見る。ああ、そういえば、と冬夜は思い出す。ウェブ漫画や小説のリンク、またはオンラインゲームのホームページなどが整理されずに並んでいた。漫画でも読み直そうか、とリンクをクリックする。しかし、ブラウザの動き

は酷く遅い。三ページほど進んだところで、次のページを長々と読み込んでいるパソコンを強制終了した。

再び暇になった、と冬夜はベッドに転がった。時計を見ると八時半になり、そろそろ学校も始まる頃だった。今から行ったところで遅刻は決定なのだが、如何せん、この暇が酷い。散らばった服を漁ってみると、随分と下のほうに制服が埋もれていた。いつから学校に行っていないのだろうか、と思い、月日を確認するために部屋を出た。

リビングには母しかいなかった。父はもう仕事に出たのだろう。「どうしたの？」

テレビを見ていた母は冬夜の姿を見ると、柔らかに微笑みながら言った。しかし、その瞳の光が僅かに揺らいでいるのを冬夜は見逃さなかった。

「いや、暇だなんて」

学校でも行こうかな、と零すと、やはりと言うべきか、母の表情は一気に明るくなった。

「でも、お昼はどうするの？」

「購買で何とかする」

「お金あるの？」

そこで冬夜は首を傾げる。我ながら間抜けだったと思いながらも確認しなければ分らない。と言うか、走馬灯なのにお腹が空くのだろうか、と考えるとおかしくなって、つい笑みが漏れた。ある、と答えて、冬夜はリビングを後にする。

家を出て、途中でコンビニに寄ろう。そこで週間雑誌などでも立ち読みして、今がいつなのかを調べるつもりだった。なかなか自由度の高い走馬灯に満足しながら、冬夜は着替えた。再び制服に身を包むことがあるとは――込み上げる恥ずかしさを一瞬で噛み殺して、冬夜は家を出た。そして自転車に跨り、ペダルを踏んだ。

まだ学校に通っていた頃、よくお世話になったコンビニで自転車を降した。当時、帰宅の途中に寄っていたので、登校中に入ったこ

とはなかった。女性店員の訝るような視線に対し、冬夜は軽く睨み返す。いらつしゃいませ、と店員は目を逸らしながら言った。

そして本棚に向かって、雑誌を手に取り、開く。その記されている日付を見ても、ぱっと思いつけないために逆算するハメになった。結果、今が高校二年の春であることが分かった。自分が学校に行かなくなり始めた頃だ、と冬夜は思い出す。これだけは忘れもない。何を隠そう、自らが殺人に走るきっかけが、この年に生まれるのだから。冬夜からすれば記念の年と言っても過言ではなかった。そうか、この年に俺は人を初めて殺したんだな、と考えると、感慨深いものがあつた。

雑誌を一通り読み終わると、それを元の場所に戻す。そして店員の冷たい視線を背中に感じながら、冬夜はコンビニを後にした。長居は良くない。学生服で、こんな時間にコンビニにいたら、宿敵の警官に補導されてもおかしくないからだ。たとえ走馬灯であっても、警官のお世話になるのは気が進まない。長い逃亡生活のせいで、警官は敵だという意識が抜けなくなっていた。

自転車に跨り、学校に向かって、のんびりと漕ぐ。既に遅れているのだから、急ぐ必要も感じられなかった。懐かしい風景に目を細め、冬夜は故郷の空気を吸い込んだ。まだ冬の残滓を感じさせる空気の冷たさと車が吐き出す排ガスの臭いで、少しむせた。幹線道路を車が颯爽と抜けてゆく。渋滞のピークは過ぎたようだった。

冬夜は腕時計に目をやった。時計は既に九時を回っている。仕事でも学校でも始業の時間だろう。ならば、ここを走っている車は一体何をしているのだろうか、と少し首を傾げながらも、一瞬でその疑問を忘れた。

やがて、学校に着く。誰一人、制服姿を見ない通学路と言うのも、これまた不思議なものだった。自分だけ妙に目立っているのではないかと、と冬夜は気が気でなかった。これも逃亡生活の癖なのか、あまりに目立つ行為は避けたかったのだ。そのため、校門を通り、自転車置き場までやってきて、冬夜は安堵の息を漏らした。

自転車を適当に止めると、下駄箱へと向かった。ふと桜のような澄んだ香りが鼻をつく。冬夜は足を止めて振り返った。自転車置き場の奥にある桜が風に揺られ、花びらが雪のようにはらりと舞い降りた。満開は過ぎているのは、桜に詳しくない冬夜にでも分かった。もう四月も後半に入っているのだから当然だ。雨が降れば、一瞬にして花びらが落ちるだろう。冬夜は興味なさそうに背を向けた。下駄箱を訪れると、やはり二年生の所に冬夜の上履きがあった。

それと履き替えて、廊下を歩く。どこから授業を進める教師の声が聞こえてくる。それ以外は音が無く、静かだった。階段を上り、教室を目指す。記憶が正しければ、ここのはずだ。冬夜はクラスの番号を確認して、扉を開いた。刹那、空気が止まる。視線が自分の下に集まるのを感じながらも、冬夜は素知らぬフリで教室に踏み込んだ。俺の姿を見たら、一度は誰もが固まる――それに何とも言えない居心地の悪さを覚えて、やはり居場所なんて無かったんだな、と冬夜は小さく息を吐いた。

当時、自分の席がどこだったかまで覚えていない。教室中を見渡して空いている席を探すと、二つあった。どちらだろうかと、冬夜は悩む。確かあちらの席だったと、あやふやな記憶に従って足を進めた。

「おい、南雲」

呼び止められて、振り返る。教師が手を差し出していた。

「遅刻届けは？」

教師の目は笑っていないかった。厳しい目つきで、冬夜を見ている。「それに遅れてきたら、言うこともあるだろう？」

最初からやり直して来い、と教師は言った。急に白けた。冬夜はそんな教師から視線を逸らして、大きくため息をついた。その態度が気に食わなかったのか、教師の眉間に皺が寄る。「何だ、その態度は」と今にも言い出しそうな雰囲気、冬夜は微笑む。

走馬灯だ、自由なのだ。肩に掛けていた鞆を、するりと落とす。身が軽くなった。そして床を三度蹴り、教師との距離をゼロにする。

教卓にあつたボールペンを掴み、教師の首筋に向けて振るつた。それを綺麗に寸前で止める。出ていない芯をかちりと押し出すと、ペン先が喉に触れて、黒い点をつけた。

それだけで充分だった。教師は一步も動けず、状況を把握してから、ようやく腰が抜けたように教卓の影に崩れ落ちた。そして手にしたペンを教卓にそつと置く。冬夜は何も言わずに振り返つた。クラスメイトの視線に一瞬気圧されながらも、自らの鞆を取るために足を踏み出した。

結局、何をしにきたのだろうか、と冬夜は考えながらも、鞆を拾い上げて教室を後にする。それと同時に授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

廊下に出ると、先ほどとは違って、音が溢れていた。椅子を引く音があちらこちらの教室から響き、やがて声が漏れてくる。誰もいなかった廊下に人が出てくる。授業を終えた教師や、馬鹿はしゃぎした男子生徒などを無表情で抜き去りながら、冬夜は下駄箱へと向かった。

「冬夜？」

そんな冬夜を呼び止める者がいた。これが嫌だったのだ。冬夜は小さく舌打ちを漏らしながら、振り返つた。久しぶりだな、と笑いながら言う男が視界に入つた瞬間、冬夜は全身の毛が逆立ちそうになるほどの感情が爆発的に生まれた。冬夜が明確な殺意を抱くのは珍しい。しかし、今日だけで二度も殺意を抱いていたら、説得力も無さそうだが、それは事実だった。

目の前が真っ赤になる。八つ裂きにしたい衝動に駆られるも、今は武器が無い。筆箱の中にコンパスや定規などがあるが、それらを取り出す時間が惜しかった。今すぐに目の前の男を殺してやりたいと握りこんだ手に力が入り、骨が鳴つた。

しかし、瞬時にそれをコントロールする。走馬灯なのだから、別に構わないのではないかと考えながらも、周囲の目が気になり、今はすべきではない、と判断したのだ。それは、もはやクセだった。

衝動を飲み込む際に、少し顔を伏せる。そして次の瞬間、冬夜が顔を上げると無表情になっていた。そして目の前の男、上村 祐介を興味なさそうに見つめていた。

「何か？」

「おいおい、用が無かったら、話しちゃいけないのかよ？」

少し驚きながらも、上村は苦い笑みで答えた。

「学校、来る気になったんだな？」

「気まぐれでな」

飲み込んだ衝動は、喉元を過ぎて落ち着いた。熱い物を飲み込んだ時とは違うのだな、と小さく呟いた。

「ん、どうかした？」

何でもない、と返して、冬夜は上村の横を通り過ぎる。

「お、おい、荷物持って、どこ行くんだよ？」

案の定、上村は慌てて冬夜についてくる。あまりにも予想通りすぎて、冬夜は思わず苦笑を漏らした。こういうヤツなのだ。人の気も知らないで、ずけずけと踏み込んでくる。そして人の居場所を奪っていった。一瞬、吐き気を覚えるも、それは現実のものではなかった。飲み下した衝動が再び喉元をせり上がってくるかのような感覚だった。

衝動を再び飲み下して、冬夜は「帰る」と返す。すると「何で？」と尋ねられた。

「それを知って、どうする？」

お前には関係ない、と冬夜は突き放した。しかし、上村はなかなか離れない。じりじりと衝動が喉の壁を上ってくる。

「理由を知れば、何とかできるかもしれないだろ？」

余計なお世話だ、と冬夜は鼻で笑ってみせる。

「お前が原因だよ、言うまでもないだろうが」

その瞬間、上村は目を剥いた。そして悲しそうに目を伏せながらも、足を止めない。未だ、冬夜の横に並んでいた。

「やっぱり、怒ってるのか？」

「そんな気がする」

冬夜の返答が曖昧になったのは、確信が持てなかったからだ。もう遠い昔の記憶だ。今、覚えているのは圧倒的な殺意だけで、それが生まれた原因となる感情を思い出せなかった。ただ、その感情を生み出した原因なら、冬夜は覚えていた。

「別に気にすることはねえよ。お前は良いヤツだ、夕夏と付き合い合えばいいさ」

どこかで言ったことのあるセリフを思い出して、冬夜はそれを棒読みした。しかし、もはや感情は湧いてこない。二人が付き合いだした当時、自分はどんな気持ちで、その言葉を吐いたのだろうか――冬夜は、それを思い出すことができなかった。

「だからさ、もう帰ってもいいか？」

「いや、そんな当然のように帰るって……良くねえと思うんだが」それに、と上村は続ける。

「部活、どうするんだ？ 先生、もう怒りも呆れも通り越して、心配してるぜ？」

そう言えば、と冬夜は思い出す。学校に顔を出すことがなくなり、それと同時に部活も行かなくなった。結果的に、それは冬夜が初めて人を殺すまで続き、学校も部活も自然と戻れなくなった。

つまり、この頃はまだ周囲が冬夜のことを諦める前だったのだろう。面倒くさいと思いながらも、現状に不思議な心地を覚えていた。走馬灯に出てくる人に心配されてるって、どういうことだ、と。

「辞めるなら辞めるって伝えにいけ、ってことか？」

どうせ結果的に辞めるのだから、と冬夜は肩を竦めながら答えた。すると、上村は大げさに首を横に振った。

「違う、何でそうなるんだよ。今まで、ずっと一緒にやってきたのに」

上村の声は怒気をはらんでいた。しかし、怒られる筋合いは無い、と冬夜は更に突き放す。

「俺の自由だろうが」

「自由だけど、勿体無い。それに辞める理由は？」

飽きた、と返すと、上村は一瞬口を開いたまま、固まった。やがて頬が引きつり、眉が釣りあがる。来る、と冬夜は体を反った。目の前を上村の拳が抜けてゆく。少し目測を誤ったのか、上村の拳は鼻先をかすめていった。そのまま冬夜の身体は後ろに倒れてゆく。その体勢を利用して、冬夜は足を振り上げた。無防備な上村の首筋に、冬夜の爪先が綺麗に入る。そこで振り抜かず、当たった瞬間に足を引いた。綺麗なハイキックだった。ただ振り抜いていない分、ダメージは軽かったようだ。上村は廊下に膝をつき、咳き込みながらも冬夜を睨み上げていた。

「良かったな」

今、武器が――刃物があったら、確実に殺していたぞ、と冬夜は心の中で呟いた。

そして、これまた随分と目立ったものだ、と冬夜は眉をひそめる。休み時間だと言うのに、廊下はしんと静まり、視線は冬夜と上村に注がれていた。そこから逃げるように、冬夜は上村に背を向けて、下駄箱に向かって歩き出した。本来なら教師に呼び止められて、怒られるぐらいの出来事なのに、誰も冬夜を止めることができなかった。しばらく顔を出さなかった冬夜の変貌に、誰もが声をかけることを躊躇ったのであった。

うるさいというこ

どこかで時間を潰すことも考えたが、こんな時間に制服で出歩いていては目立つと考え、冬夜は寄り道もせず家に帰った。母に「どうしたの」と尋ねられ、「面倒くさくなって帰ってきた」と告げると、肩を落とした。少し悪いことをしたような気がしたが、そんな小さな罪悪感は一瞬にして消え失せる。

着替えを済ませて、冬夜はベッドに転がった。もうパソコンを起動する気にはなれなかった。眠ろう、と目を瞑る。しかし、なかなか眠りにつけず、冬夜は身を起こした。無駄に長く、精密な走馬灯だな、思わず皮肉を零し、空腹を訴えかける胃を恨みながらも、階段を下りる。何か無いだろうか、とインスタント食品を探していると、母がリビングに顔を出した。

「お腹空いたの？」

その通りだったので、冬夜はうなづく。すると、母は「ご飯にする」と台所にやってきて、尋ねる。

「何がいい？」

冬夜は「何でもいい」と返した。実際、空腹を満たすものなら、何でも良かった。そのため、調理が簡単なインスタント食品を探していたのだ。結局、炒飯を作ることにしたようで、母は冷蔵庫から野菜を取り出していた。

料理ができるまで、冬夜はぼんやりとテレビを眺めながら考える。ここまで走馬灯が長引くことなんてあるのだろうか。それを知るには、走馬灯を経験した人に聞くしかない。しかし、そんな稀有な体験をした人は身近にいるはずもない。

ただ、冬夜にとって走馬灯とは、人生のダイジェストを一瞬で眺めるようなイメージだった。しかし、これは違う。時の流れすら正確なのではないかと思うほど、精密な世界が存在した。記憶に無い箇所が、ぼんやりと霞んでいるわけでもなく、目を凝らせば全てを

見てとれる。当時、絶対あんなところを見ていない、と言い切れる箇所に目をやっても、そこに何かがあるのか、はつきり見えるのだ。過去の記憶から推測して、世界を作り上げているのだろうか、と冬夜は考える。それなら、それでいい、と冬夜はため息をつく。

それとは別に、こうも長々と走馬灯を見るのは、今も自分の身体が集中治療室で手術を受けており、生死をさまよっているのではないだろうか、とも考えた。それなら、さっさと殺して欲しいものだ、と冬夜は小さく息を吐く。どうせ生き延びたって、退屈な時間を過ごし、結果的に死刑になるのだから。たとえ、無期懲役だったとしても、そんな退屈な時を過ごすぐらいなら、首を吊ってでも死んでやる、呟いた。

はい、と母が皿を持ってきた。そこに乗った黄色い米が、良い匂いを放つ。いただきます、と言って、冬夜はスプーンで炒飯をすくった。熱い、そして美味しい。玉ねぎの風味が程よく残り、口内に広がる。精密な走馬灯で良かった、と冬夜は炒飯を一気にかきこんだ。

程良く胃袋を満たし、しばらくすると眠気がやってきた。ぼんやりとテレビを眺めるのも久しいことだったが、平日の昼間に興味を引くような番組は無かった。暇だ、と呟いて、冬夜は席を立った。そのままリビングを後にして、自室へと向かう。散乱した服を構うことなく踏んで、ベッドに横たわった。

現状に関する仮説は二つある。実際は三つあったのだが、それはあり得ない、と冬夜は一番最初に切り捨てた。

まずは一つ目、現状はこの仮説の上に行動を取っている。この世界は走馬灯だ。今頃、生死の境をさまよっている自身の身体を医者たちが必死にいじり回しているのだろう——ぞつとする。

ただ、この世界は本当に走馬灯なのだろうか、と疑念が湧いてきているのも否定できない。味覚、聴覚、触覚、視覚、嗅覚。それら全ての情報が生々しかった。走馬灯クオリティとは、そんなものなのかもしれない。今まで脳に蓄積された感覚の全てを動員して、走

馬灯のクオリティを底上げしているのかもしれない。だとすると、人の脳は凄いものだ、と冬夜は素直に感心した。

しかし、それでも一つだけ解消されない問題がある。この走馬灯仮説を根本から揺るがす問題——それは冬夜が自由に振る舞えていることだ。冬夜は、ここまでで既に記憶とは、かなり違った行動を取っている。走馬灯とは、そんなものなのだろうか、と経験の無い冬夜は考えるも、やはり走馬灯で済ますには、どこか納得がいかなかった。

だから行動方針を変えるべきか、と冬夜は思案する。もう一つの仮説に従って動けば、無難にはなる。しかし、それはそれで退屈になるだろう、と冬夜は思わずため息をついた。二つ目は、一度は死んだと思っていた世界は夢でした、と言う仮説だ。冬夜は人をたくさん殺してきたが、それは全部夢の中だった、と言うことになる。こんな馬鹿な話があるか、と冬夜は思う。この仮説には決定的な欠陥があり、それを見つけるのも、そう苦労しなかった。

痛みだ。幾度と無く銃で撃たれ、刃物で切りつけられ、警棒で殴られ、とたくさんの痛みを経験してきた。あれらの説明は脳が自動再生しました、では済ませられない。度を超す痛みには熱さを感じると知ったのは、あちらでの経験だ。つまり、蓄積された感覚から、それを再現する力はないはずだ、と冬夜は考える。それに夢とは痛みを感じないものだ。それだけは冬夜も確信を持って言える。幾度と無く夢を見てきた中で、銃で撃たれることもあったし、刃物で突かれることもあった。しかし、そこに痛みはなかった。目覚めた際に少し気分が悪い程度だった。

二つの考察を終えて、残った一つが異様な存在感を放っていた。あり得ないと分かっている、笑い飛ばせるぐらい、ぶっ飛んだ仮説であることを理解しながらも、冬夜はそれを無視できなくなっていた。しかし、それは無い、と再び否定する。

時が遡った、だなんて。

「……下らん」

小さく呟いて、冬夜は目を閉じた。布団が温まり、眠気に抗いたいものになっていた。それに身を委ね、試行を停止させた。

*

やがて、冬夜は目覚めた。否、騒がしい物音に起こされたと言っべきだろうか。不機嫌そうに眉をひそめながら、冬夜は身を起こそうとした。しかし、その瞬間を見計らったかのように、腹部に衝撃を受ける。それで冬夜の意識は一気に覚醒する。重い掛け布団を無理矢理はがし、中腰になって構えた。しかし、襲撃者を見て、一気に力が抜ける。

「兄ちゃん、祐介さんを蹴ったんですって!？」

夕夏は冬夜の袖を掴み、わめく。目は血走っており、不用意な発言は控えるべきだ、冬夜は一瞬で悟った。

「やっと学校に顔出したと思ったら、何してんのよ！」

無駄だとは思いつつも、冬夜は事実を告げてみる。

「いや、先に殴りかかってきたの、あいつだぜ？」

実際、先に殴りかからせるような挑発をしたのは冬夜だが、それは意図的に言わなかった。しかし、それを聞いた夕夏の反応は予想外だった。

「知ってる」

「知ってるの？」と呟きながらも、冬夜は思わず耳を疑った。

「祐介さんが言ってた。先に殴りかかった俺が悪いから、兄ちゃんを責めないでくれ、って」

完全に悪者じゃねえか、と冬夜は内心で苦笑を漏らす。ただ、そこまで気にすることはなかった。その程度で罪悪感を抱くほど、冬夜は弱くなかった。否、弱くないと言うよりは、健常ではない——異常だった。

「でも……何で？」

夕夏は叫ぶ。目尻に涙が溜まっていた。それは今すぐにでも溢れ

出しそうだった。思わず冬夜は目を逸らしそうになった。事実を話すべきか、と冬夜の心が揺らぐ。上村を恨んでいる、と言うべきか一瞬だけ迷った。

しかし、夕夏の後ろに母の姿があつたので、出かかっていた言葉を全て飲み込んだ。恐らく、母は騒ぎを聞きつけて、やってきたのだろう。あまり事態を理解できていないのか、顔を青くしながら冬夜と夕夏を見つめていた。

「……部活の件でもめてな」

「知ってる、辞めるんでしょ」

聞いたのか、と冬夜が呟くと、夕夏は小さくうなづいた。

「祐介さんの言うとおりだよ、勿体無い。今まで兄ちゃんのことを知ってるから、辞めてほしくないんだよ」

なのに辞めるの？ と夕夏は尋ねた。それに冬夜は迷うこともなく、うなづく。

「辞める。できれば学校も辞めたいな」

もう何もかもやめたい、と喉元まで出かかったが、それは飲み込んだ。しかし、それは冬夜にとって偽らざる本音だった。

しかし、部活だけでなく、学校も辞めたいと言っただけで、夕夏と母は固まった。それを見て、その後の言葉を飲み込んで良かった、と冬夜は心密かに胸を撫で下ろした。

「冗談だよ」

学校は、と冬夜は最後に付け加えた。ただ学校を出たところで、本当に自分のためになるとは思えなかった。逃亡生活中に見てきた世界は、不景気のどん底を突き破って、更に奥深くに沈んでゆくように見えた。学校を出ていれば、多少はマシだろう。しかし、結局はその程度だ。マシなだけで苦しいことには変わらない。

それに対し、冬夜は気が向いた時に人を殺し、それが発覚するまで住居とお金を自由に使い、気ままに生活していた。時に警官に追われたりもしたが、平和な日常に振りかけるスパイスとしては上質なものだった。

どれほど憎まれようと、冬夜は決して不幸な人生を歩んできたとは思わなかった。ただ、そう思う時点で、既に人として大事な部分を失っているのだろうな、と冬夜は理解した上でのことだった。既に自分は壊れている。大事なネジを失ってしまったのだ。

「話がある、って」

夕夏がぼつりと呟いた。自由気ままな生活に思いを馳せていたため、冬夜は少し反応が遅れた。

「は？」

「だから、祐介さんが話したいって言ってたの」

夕夏はじつと冬夜の瞳を見つめたまま続けて言う。

「祐介さんが怒るなって言ったから、私は何も言わない。けど、祐介さんとはちゃんと話をして、絶対」

もう既に怒ってたじゃねえか、と冬夜は小さく呟く。「何？」と夕夏に凄まれて、冬夜は目を逸らした。

「今晚十九時、河川敷の公園で待つて、って」

話したって無駄だと思う。むしろ、そんな人気の無いところに誘い出して、上村は何を考えているのだろうか、と勘ぐった。しかし、このときの上村は冬夜に殺されるだなんて、夢にも思っていなかったのだろう。殺しやすいか、と冬夜は小さく息を吐きながらも了承する。

「分かった」

「ちゃんと謝ってよね」

分かった、と冬夜は再び返事をした。謝るところか、これから上村を殺そうと考えているのに。

二人が部屋を出ていき、足音が遠ざかるのを確認してから、冬夜は部屋の扉をそつと閉めた。そして机の引き出しをかき回す。何か武器になるものはないか、と必死に探す。その顔に笑みが浮かんでいることは、本人の冬夜すら気づいていない。

やがて、冬夜の手が止まる。そつと引き出しから抜いた手には、大きなハサミが握られていた。裁縫などで布を切る際に使うハサミ

で、切れ味はそこそこある。突きには向いていないことを認めつつも、これは使えると冬夜は確信していた。硬すぎず、柔軟性に富んでいることから、折れにくいだろう。ただ相手の攻撃を受ける際は、この柔軟性がどんな働きをするのか、クセを見極めて使う必要がある。

大体の考察を終えて、冬夜はそれを机の上に置いた。そして宙に向かつて手を伸ばす。最初は酷く鈍い動きだった。しかし、徐々に速度が増し、動きも鋭くなってゆく。手を振るう度に、僅かに床が鳴く。しばらく身体を動かして、冬夜はまじまじと自らの両腕を見つめた。違和感があった。何とも言えない違和感が。イメージ通りに身体が動いてくれず、冬夜は少し苛立った。乱暴にベッドに腰を下ろし、壁に掛けられた時計を見た。随分と眠っていたらしい。時計の針は十七時を示していた。

*

「……で、何でお前まで来るんだよ」

尋ねるのではなく、責めるような口調で、冬夜は隣の夕夏に言った。

「ちゃんと謝るか、心配だし」

しれっと夕夏は答えるも、その心配はある意味で的中していた。冬夜のポケットには、引き出しにあったハサミが入っている。家を出る前に多少の改良を加えて、これから試し斬りだ、と冬夜は胸を躍らせていた。しかし、夕夏がついてくるとなると、話が変わってくる。がつくりと肩を落としながらも、夕夏を帰らせる方法を考える。

「絶対に謝る」

もちろん嘘だが、冬夜はさらりと言ってみせる。それどころか、反省の色を見せずに殺しに向かっているところだ。

「なら、私が一緒しても問題無いでしょ？」

うん、確かに、と冬夜は思わずうなづいてしまった。

それから会話はなく、アスファルトを淡々と踏みしめながら、待ち合わせの河原へと向かった。その後を続く夕夏の足音だけが冬夜の耳に届いた。

街灯がいくつも並び、近くを通り過ぎる度に電磁波を放っているような音が聞こえた。実は街灯の中に特殊な電波照射機が組み込まれていて、知らぬ間に洗脳されているのかもしれない、と冬夜は考えてみたが、どうでも良かった。

既に日は沈み、星が空で瞬いていた。昼間は随分と暖かくなってきたものの、夜はやはり寒い。夕飯を食べたばかりで身体が火照っているせいか、外気の冷たさがより沁みた。少し忠実に再現しすぎだよ、走馬灯さん、と内心で呟いてみるも返事は無く、寒さが緩和されることもなかった。

やがて、道は緩やかに上り、二人の視線の先に堤防が見えた。そこを越えれば河川敷の公園がある。ふと耳を澄ませると、何かの音が聞こえた。懐かしい音だった。二回続けて音が聞こえて、しばらくの静寂。そしてまた音が二度続けて、静寂が訪れた。それは堤防に近づくにつれて大きくなっていった。音の主は言うまでもない、上村だ。冬夜がやってくるまで、ボールを蹴っているつもりなのだろう。

結局、夕夏を振り切ることもできず、ここまで来てしまった。どうしたもののか、とあまり悩む様子もなく、冬夜はぼんやりと考えていた。

既に冬夜と夕夏は堤防のすぐ傍までやってきている。そこで唐突にボールの音が止んだ。代わりに怒声が二人の下まで届く。一瞬だけ夕夏と顔を見合わせて、冬夜は堤防を駆け上った。河川敷を見下ろすと、街灯のか細い光の下に上村の姿があった。その近くに人影が三つほど視認できる。冬夜は状況を把握するために目を凝らし、耳を澄ませた。

「お金なんて持ってません」

上村の声は少し震えていた。なるほど、と腕を組みながら、冬夜はのんびりと光景を見下ろしていた。これなら手を出すまでもなく、上村は死んでくれるかも、と薄い笑みを浮かべながら。

ああいった輩が取る行動は限られている。まずはお金を要求、持つていなければ八つ当たり——つまり、リンチだ。多人数で暴力を振るう場合、歯止めが利かなくなる。外から冷静に見て、止めに入る者がいなければ、被害者が帰らぬ人になることも珍しくない。さて、どうなるか、と冬夜が見つめていると影が動いた。一斉にだつた。

「死ぬかもな」

隣に夕夏がいることを考えると軽率な発言だったと言える。しかし、笑わなかったただけマシだと冬夜は言えた。今にも腹を抱えて、転げ回リたかったが、それは辛うじて堪えた。

「……っ、悠長なことを言ってる場合じゃないよ!？」

夕夏は堤防を下りていこうとする。それを冬夜は止めた。無造作に腕を掴んで、ぐいと引き寄せる。

「馬鹿か、お前。輪姦まわされてえのか？」

びくりと夕夏の肩が震えた。

「で、でも！」

それでも冬夜の手を振り解こうと、夕夏は腕を振る。しかし、冬夜は更に力を込める。

「な……兄ちゃん、痛い！」

「言っても分からんのなら、痛めつけるしかないだろ」

さらりと冬夜は言った。それを見て、夕夏はぞつとした。兄の顔があんな醜く歪むのを初めて見たのだ。

「まあお仕置きは、これぐらいで」

冬夜は手を離し、夕夏はバランスを崩して尻餅をついた。しかし、そちらを一瞥することなく、冬夜は河川敷に向けて一歩踏み出した。

「そこで見てろ。何かあったら大声を出せ」

「は？　ちよつと、兄ちゃん？」

夕夏の呼びかけを無視し、くるぶしほどまで生えた草を踏んでゆく。しかし、僅かな音しか立てず、冬夜はそつと男たちに近づいた。上村のリンチに夢中になっているのか、男たちは冬夜の接近に近づかない。悪魔のような笑みを浮かべた――否、本物の悪魔が音もなく近づいていることに気づかない。

まずは一人、後頭部に蹴りを叩き込んだ。しかし、一撃で仕止めきれなかった。男はよろめきながらも、倒れることはなかったのだ。やっぱり何かがおかしい、と冬夜は訝りながらも続けて拳を振るう。男は体勢を崩していたため、受けることもできなかった。冬夜の拳を受けて、無様に伏す。しかし、まだ動きがあった。しぶといな、と冬夜はポケットに忍ばせたハサミに思いを馳せる。やっちまうか、と思ったところで、他の二人が冬夜に気づいた。

「何だ、てめえ」

低く威圧するような声に、冬夜はわざとらしく肩を竦める。

「そいつ、俺の獲物なんだよね。勝手に殺されたら困るんだよね」

上村を指さしながら、冬夜は言った。男たちは一瞬黙ったが、すぐに「何を言ってるんだ」と吠えた。

同時に二人、無理だな――武器なしでは。冬夜は今度こそ迷わずに両手をポケットに突っ込んだ。そしてハサミを取り出す。しかし、右手に見える刃は一つだけだった。そして対の手にはもう一つの刃が握られていた。

そして男たちと交錯し、両手を振るう。それは淀みのない綺麗な動きで、手にしたハサミが銀色の一閃となった。右手で一人、左手でもう一人を斬った。

冬夜に躊躇いはなかった。世界の仮説も、夕夏や上村が見ていることも、そして再び殺人の罪で追われることも全て眼中に無かった。ただ渋い顔で、やっぱりおかしいと呟き、首を傾げた。やがて「ハサミではこの程度か」と、冬夜はため息を漏らす。

「今ので手首落とす予定だったんだけどな」

男たちは啞然と冬夜を見つめ、やがて自らの手首に目をやった。

僅かな街頭に照らされて見えるのは、ぱっくりと開いた赤い口だった。やがて、そこからじわりじわりと血が流れ出す。男たちは手首を押さえたまま、冬夜を見つめた。男たちの額から、どっと汗が噴き出し、瞳には畏怖の色が浮かんでいた。

「さすがに骨は断てないか。それなら最初から動脈を狙ったんだけどな」

もし狙われていたら、と思うと男たちはぞっとした。本物の恐怖とは、こういうものなのか、と痛感する。そして今更ながら自分たちの行動を後悔した。

「なあ、まだやるか？」

刃を空に放り投げながら、冬夜は尋ねた。刃は回転しながら落ちてきて、再び冬夜の手に残まる。刃は街灯の光を鈍く反射していた。まだ血が僅かに残っている刃を弄びながら、冬夜は男たちに迫った。冬夜の態度は、ファミリーストランで注文の確認をする店員のような薄っぺらい笑顔を持ち合わせながらも、拭いきれない恐怖があった。

しばらくの沈黙。やがて、男たちは冬夜を警戒することなく、背を向けて走り去っていった。あんまり派手に動くと出血が酷くなるのに、と小さく呟きながら、冬夜はその後ろ姿を見送った。

やがて、音もなく振り返る。上村は街灯の下で啞然と冬夜を見つめていた。そして冬夜は微笑む。ハサミの取っ手のところに指を引っかけて、刃を勢いよく回した。

「さて――」

「兄ちゃん、祐介さん！」

どうやって苦しめてから殺そうか、と恍惚の表情で考えていたところを、夕夏の声で現実引き戻された。軽く舌打ちを漏らし、冬夜は振り返る。草を盛大に踏みならしながら、夕夏が堤防を駆け下りてくるところだった。

「今は何も言わない」

夕夏に聞こえないよう、冬夜は小さく告げた。その際に見せた冬夜の眼光は鋭く冷たかった。その視線に射竦められて、上村は静かにうなづいた。

*

翌日。暇を潰すために、冬夜は再び学校を訪れた。しかし、登校と同時に職員室に呼ばれ、昨日の教師と上村に対する暴行の叱責を受けた。それで結局、一時間が潰れて、二時間目から授業に参加することになった。しかし、退屈な時間が過ぎるばかりで、冬夜は寝て過ごすしかなかった。

やがて、昼休みになり、冬夜は一人で弁当をつつく。四月前半の不登校から復帰したものの、クラスメイトの大半が冬夜の変貌に困惑していた。どう接するべきか悩んでいるようで、時折向けられる視線に、冬夜はうんざりとしていた。明日から学校に来るべきかどうかを悩みながら、冬夜は空になった弁当箱を鞆にしまった。

しかし、冬夜にとって予想外の事態が起きる。上村がやってきたのだ。顔は絆創膏やガーゼ、瞼の上は青く腫れ上がっていた。「この程度で済んで良かったな」と冬夜は嫌味っぽく笑いかけた。

上村がやってきた理由は分かる。昨晚のことだろう。冬夜は上村を引き連れて、教室を後にした。階段を上り、音楽室や美術室の並び階を目指した。この時間、特別教室の周辺は人気がないからだ。聞かれたくない話をするには最適だし、殺すにしても邪魔が入りにくい。ただ、こんなところで殺したら目撃者多数ですぐさま犯人確定だろう。しかし、そんな細かいことを気にする繊細さなど冬夜は既に捨てていた。

「説明する義務はないね」

こいつは本当に死にたいのか、と冬夜は半ば苛立ちながら、上村に言った。今は夕夏というストッパーがない。今なら簡単に殺せるだろう。しかし、あまりにも軽率な行動ばかり取る上村を哀れに

思つのも、また事実だった。自分が殺すまでもなく、勝手にどこかで死ぬんじゃないかと思えたのだ。

「確かに義務はない。けど、何であんなこと——」

「だから、それに答える義務も無いだろ」

流石に二回目になると、冬夜の語気が強まった。冬夜はポケットに入っている二本の刃に手を伸ばす。刃同士が触れ合い、音が鳴った。それだけで上村は理解したようで、一步下がった。結構です、と言わんばかりに首を横に振りながら。

「でも、部活を辞める理由って——」

「関係ねえよ」

完全に無いとは言い切れない。ただ、上村は納得がいけないと言った様子だった。まるで捨てられた子犬のような目をして、冬夜を見てくる。「ああ、面倒くさい」と冬夜は頭を掻いて、乱雑に言う。

「お前が気に入らんから、部活は辞めたんだ」

突き放す一言としては充分だったはずだ。しかし、上村は引かない。少し悲しそうに目を伏せた後に顔を上げた。それは、どこか決意の見える顔つきで、冬夜は思わず身構えた。

「夕夏と付き合い始めたからか？　だったら今は別れる。お前が納得してくれるまで待つから」

俺にとってはお前も夕夏等しく大切なんだ、と上村は冬夜に迫る。冬夜が刃を持っているのも気にせず——否、気にする余裕がなかったのだろう。それは冬夜も理解できた。何て必死な顔で、すがりついてくるんだよ、と冬夜は顔を引きつらせた。

「離れる、殺すぞ」

上村ははっとして、一瞬で冬夜から離れた。顔色は青い。そんな上村を見て、冬夜は苦い表情で首を横に振った。

「お前にだけは絶対に教えねえ」

そう一言残して、冬夜は上村に背を向けた。

お前がそんなだから——良いヤツすぎたから、俺が狂うしかなかったってのに。良心と嫉妬の狭間で、どれほど俺が苦しんだかも知

らずに。

冬夜は一度も振り返ることなく、教室へと戻っていった。残された上村は、ただ悲しそうに冬夜の背中を見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2945o/>

殺人鬼の日常。

2011年12月3日16時47分発行